

全力疾走 時代開く

千葉の伝説
五輪・パラ

5

パラ陸上・車いす女子100メートル
1996年アトランタ金
2000年シドニー金

荒井のり子さん 46

連覇の瞬間を、日本で見届けた人はいなかった。「当時はテレビ中継がなかったから」。2000年にシドニーで開かれたパラリンピック。陸上・車いす女子100メートルで2大会連続の金メダルに輝いた荒井のり子(46)は懐かしむ。



あらい・のりこ 1973年6月18日生まれ。飯岡町(現・旭市)出身。県立銚子養護学校に在学していた17歳の頃から、レーサー(競技用車いす)で陸上競技に取り組んだ。96年アトランタ・パラリンピックの車いす女子100メートルで世界新記録をマークし、金メダルを獲得。県民栄誉賞に輝いた。2000年シドニー大会で100メートル連覇を達成。04年アテネ大会における3大会連続メダルの功績が評価され、知事特別賞を受賞した。3大会のメダル数は金2、銀2、銅1の計5個。引退後は講演活動などを通じて、パラ競技の普及に努めている。

20世紀最後の五輪となったシドニー大会で、日本勢は女子選手の活躍が目立った。マラソンの高橋尚子が陸上女子で初の金メダルを獲得。柔道の田村(現姓・谷)亮子は3回目の挑戦で初めて金メダル

をつかんだ。

五輪の後、パラリンピックが始まった。荒井は得意とする100メートルの決勝前夜、なかなか寝付けなかった。初出場の1996年アトランタ大会で100メートル金、200メートル銀と2個のメダルを取り、周囲から大きな期待を寄せられていた。「逃げてしまいたい」。重圧で押しつぶされそうになった。

いったんベッドに潜り込んだ後、飯岡町(現・旭市)からシドニー入りしていた母の美代子(74)と電話で話した。「練習通りで大丈夫」。母の言葉に勇気づけられた。「オン・ユア・マークス」。競技場が静寂に包まれる。前傾

姿勢のまま100メートル先を見つめた。ピストルの音と同時に腕を強く押し出した。スタートダッシュを決め、そのままゴール。全身の力が抜け、コーチと抱き合っって涙を流した。同じ頃、日本の自宅では、父の輝男(当時58歳)と祖母のきよ(当時76歳)、近所の人たちが電話の前に集まっていた。「金メダル取ったよ」。荒井は息を弾ませながら、受話器を取った輝男に伝えた。「万歳、万歳」という声を聞き、再び涙が流れ落ちた。

荒井は脳性まひのため、生まれつき下半身が不自由だった。子供の頃からテレビでマラソン中継を見るのが大好き。高校2年の時、放課後に友だちと通常の車いすに乗る様子を見たパラ陸上の関係者から「素質がある」と競技を勧められた。

レーサー(競技用車いす)

に乗ると、正座のような体勢のまま前に傾く。初めて乗った時は地面に顔をぶつけそうになった。「怖い。だけど、カッコいい」。競技場を疾走する自分の姿が目に見えなかった。

憧れていたのは、県内ゆかりのアスリートで、1992年バルセロナ五輪の女子マラソンで銀メダルに輝いた有森裕子だ。力を出し切って走る姿に心を揺さぶられた。自身も厳しい練習を積んだ。有森が銅メダルを取った96年アトランタ五輪と同じ地でパラリンピックのデビューを果たし、活躍することができた。2000年シドニー大会は100メートル連覇の勢いを駆って、200メートルでも連続銀メダルを獲得した。

04年アテネ大会では、3連覇を目指した100メートルが4位、200メートルは銅メダルとなり、引退を決意。「ロザリオの聖母会」(旭市)が運営する障害者の就労支援施設で働きながら、講演活動などを続けてきた。

初めてパラリンピックに出場してから24年。東京大会を控え、日本代表の選考が大きいく報じられ、車いすや義足のアスリートの特集が組まれることも多い。4競技の会場となる県内では、一般向けの体験会などが開かれている。荒井は県内を巡る五輪の聖火ランナーに選ばれた。「こんな日が来るとは思わなかった」。パラリンピックに挑む「後輩」たちのためにも、精いっぱい走るつもりだ。



シドニー・パラリンピックの車いす女子100メートル。連覇を果たし、笑顔でポーズを決める荒井のり子